

公益財団法人 立松財団 御中
様式 2021C

2025 年 8 月 30 日

所属: 豊橋技術科学大学

氏名: 仙田 大空



2025 年度 助成 海外調査研究終了報告書

※ゴシック文字で記入下さい。

渡航目的	8 月 25 日～28 日にドイツのマインツにて開催された ECVP2025 で研究発表を行い聴講者から意見をいただくとともに、当該分野における研究発表を聴講し、情報収集を行うため。
渡航日程と 海外での成果 (発表・調査など)	8 月 22 日: 移動 (日本 (豊橋) → 日本 (中部国際) → 日本 (成田)) 8 月 23 日: 移動 (日本 (成田) → ドイツ (フランクフルト) → ドイツ (マインツ)) 8 月 24 日: 開会式 8 月 25 日: 学会発表, 聴講 8 月 26 日: 聴講 8 月 27 日: 聴講 8 月 28 日: 聴講, 閉会式 8 月 29 日: 移動 (ドイツ (マインツ) → ドイツ (フランクフルト) → 日本 (成田)) 8 月 30 日: 移動 (日本 (成田) → 日本 (中部国際) → 日本 (豊橋))
研究内容の概要	本研究は、主観的な明るさ感が無意識下でどのように処理され、それがどのように身体的反応へとつながるのかを明らかにしようとするものである。これまでの視覚研究では、明るさの知覚は主に物理的な刺激量や照度といった客観的要素に基づいて評価されてきたが、近年、錯視や視覚文脈の影響により、同一の物理刺激であっても主観的な知覚は大きく変化しうることが示されてきた (Tamura et al., 2016)。それにもかかわらず、こうした主観的知覚と生理的・認知的応答との関係性、とくに無意識下での情報処理との関係については、十分に検討されているとはいえない。本研究はその空白を埋め、視覚認知と生体応答の接点を明らかにすることで、人間中心のインタフェース設計や快適な視環境の構築、さらには高齢者や感受性の高いユーザーへの支援技術の開発に資する基礎的知見を提供する。 特に本研究は、明るさのような低次の視覚特性に注目し、それが部分的に無意識下へ抑制された場合でもどのように主観的知覚や生理的反応として現れるかを検証する点において獨創性を持つ。従来の無意識下視覚研究は、顔や感情といった高次の社会的意味を持つ特性に焦点を当てることが多く (Jiang et al., 2007)、低次特性に対する関心は比較的乏しかった。本研究では、刺激全体ではなく、効果に寄与する構成要素だけを選択的に抑制するという呈示手法を導入し、物理刺激と主観的知覚の乖離が意識以前の段階で生体レベルにどう現れるのかを精密に検証する。これにより、人間の知覚と行動との間にある繊細な関係性を再定義し、感覚設計における新たな視点を提供することが期待される。

提出期限: 帰国後すみやかに助成金の「必要経費使途明細書」「領収書」と合わせて提出下さい。